

認知意味論の観点からみた多義動詞「ひく」の意味記述の精緻化

崔 暁 文*

An Elaboration of the Semantic Description of the Japanese Polysemous Verb “HIKU” from the Viewpoint of Cognitive Semantics

CUI Xiaowen

Abstract

In this study, we performed semantic analysis of the Japanese polysemous verb “HIKU” and we tried to elaborate its semantic description, focusing on four issues of polysemous word semantic analysis. As a result, the following points were clarified. 1) Based on the most concrete and unmarked sentences of “HIKU”, the prototype meaning can be identified as “a person moves things toward himself”. 2) There are 20-word meanings of “HIKU” which were identified using the method of combining the related words and cases. The case types in the semantic description include “Agent”, “Instrument”, “Patient”, “Result of the change of Patient”, “Source” and “Goal”. 3) Multiple word meanings of “HIKU” are related with the prototypical meaning by metaphorical and metonymic connections and they form a radial category. In addition, the moving of the Focus of the Profile results in several special uses such as “Result Object”, “Instrument Object”, “Source Object”, “Route Object”, “Instrument Subject” and the intransitive uses.

Keywords : polysemous verb, semantic analysis, prototype, word meanings distinction, semantic extension

1. はじめに

第二言語学習者が初期段階で学習する基本動詞の多くは多義動詞であり、その意味範囲も広いため、すべての語義を習得するのは難しい。しかも現存する国語辞典における多義動詞の意味記述はほとんど語義の羅列に留まっており、語義間の関連性を明記していないため、語義の習得をさらに困難にしている。一方、認知意味論の観点によれば、多義動詞のそれぞれの語義は独立に存在するものではなく、ある語彙カテゴリーの中でお互いに関連し合い、プロトタイプ義を中心とした放射状カテゴリーを形成するとされている (Lakoff, 1987)。近年この観点を踏まえ、多義動詞の複数の語義の関連性 (意味構造) を分析する研究やそれを重視した辞書開発 (瀬戸, 2007; 森山, 2012など) が現れるようになった。しかし、その多くでは意味構造の分析が研究者の内省に委ねられ、同じ語の意味分析でも研究者によって分析結果が一致していないことが多い。この限界を克服するために、不特定多数の日本語母語話者を対象にその言語使用を調査する心理実験 (森山, 2015など)、用例を網羅的に収集して統計的手法で多義動詞の意味構造を分析するコーパス分析 (Gries, 2006; 李, 2008) といった分析手法が提唱された。このうち、心理実験は不特定多数の母語話者の心理的実在性が調べられるが、意味分類に関する調査対象者の判断が表面的になりやすいという限界が指摘されている (森山, 2015)。それに対し、コーパス分析は統計的手

キーワード：多義動詞、意味分析、プロトタイプ、語義認定、意味拡張

*平成28年度生 比較社会文化学専攻

法で分析の客観性を高められるが、用例のタグ付け方法はまだ確立されているとは言い難い。このようにどの手法にも長所と短所が見られ、依然として改善の余地が残されている。

実際、内省分析を補完する研究手法として登場した心理実験やコーパス分析であるが、実験文の選定や意味分類は内省分析の結果に基づくことが多い。そのため、意味分析研究をさらに進めていくには、まずその第一歩として内省分析の方法論を整備し、意味記述を精緻化させることが求められる(森山, 2016)。初山(2001)は多義語の意味分析にあたり、1) 理論的枠組みの解明、2) プロトタイプ義の認定、3) 複数の語義の認定、4) 複数の語義の相互関係の明示の4つの課題を議論する必要があると指摘している。これまでの意味分析研究を概観してみると、4つの課題のうち、いくつかを検討した研究はあるが、すべてを厳密に検討した研究は管見の限り少ない(崔, 2019)。ゆえに、多義動詞の意味分析研究にはかなりの不備があると言える。そこで、本研究は初山(2001)が指摘した4つの課題に焦点を当て、多義動詞「ひく」を例に意味記述の精緻化を試みることを目的とする。

「ひく」を扱う理由は以下の通りである。森山(2017)が指摘したように、「ひく」の様々な意味用法の中には、「綱をひく」のように対象を目的語とする一般的な他動詞用法以外に、「ピアノをひく」のように道具を目的語とする道具目的語用法、「線をひく」のように結果を目的語とする結果目的語用法が数多く存在している。しかし、これらの意味用法の意味展開パターンを解明した研究は少ない。本研究はそれを解明することで「ひく」の意味記述の精緻化に寄与し、同様の他の動詞の意味分析にも応用が可能であると思われる。

2. 先行研究

認知意味論の観点から「ひく」の語義を詳細に分析した研究には鷺見(1997)と李(2016)がある。鷺見(1997)は「ひく」の様々な意味用法で使用される例文を取り上げて意味分類を行い、その語義を15個に分けて意味を記述した。李(2016)は現代日本語書き言葉均衡コーパスから用例を網羅的に収集し、鷺見(1997)の結果を踏まえた上で、「ひく」の語義を18個に分けた。この2つの研究は共にLakoff(1987)の「放射状カテゴリー」という理論的枠組みを援用し、「ひく」の様々な語義の関連性を明示したという点は参考になるが、以下に示すように、①プロトタイプ義の認定、②語義の認定、及び③語義の相互関係の明示という3つの課題において限界が見られる。

①のプロトタイプ義の認定においては、鷺見(1997)と李(2016)はその認定基準を明確に言及していない。プロトタイプ義は一般的に「理論的プロトタイプ」と「心理的プロトタイプ」に分けられるが(田中, 1990)、内省分析では特に明記しない限り前者の方を指すことが多い。しかし、「理論的プロトタイプ」の認定にも「具体性」、「使用制限が少ない」、及び「拡張の起点」など、複数の認定基準が提案されているため、認定基準の相違によって認定結果が異なる可能性がある(崔, 2019)。ゆえに、「ひく」のプロトタイプ義を厳密に認定するために、明確な認定基準を設定することが必要であろう。

②の語義認定では、鷺見(1997)では15個、李(2016)では18個の語義が認定され、認定結果の不一致が見られる。また、個々の語義記述では動詞の意味記述にとって必要となる情報(共起項)に関する配慮が不十分である一方、意味決定に重要でない背景知識や文脈の意味が含まれている。そのため、プロトタイプ義の中に「延ばす」の意味が付加された「カーテンをひく」のようなプロトタイプとは言い難い拡張的用法が混在するなど、意味分類に不適切な箇所が観察された。さらに、これらの研究では「手をひく」の慣用的意味を独立した1つの語義と認定するかに関して意見の相違が見られる。多義動詞の語義はそれが使われる構文と密接な関係があることがしばしば指摘されるが(野田, 2017)、一般に慣用的意味用法は動詞自体の意味というよりも、その動詞が特定の構文の中で活性化された意味であり、動詞の意味分析では除外すべきであろう。このように、「ひく」の語義認定でいくつかの問題点が見られるが、これらの原因として、語義認定基準の曖昧さが考えられる。ゆえに、適切な語義認定方法を選び、語義認定を再検討する必要がある。

③の複数の語義の関連性では、鷺見(1997)と李(2016)は初山(2001)の提唱した3種類の動機付けによって分析したが、「道具目的語」と「結果目的語」などの用法に関する説明が十分になされていない。その限界を克服するために、「ひく」の意味展開パターンをさらに精緻化させる必要がある。

以上①～③の3つの問題点を踏まえ、本研究では研究課題を次の3つに設定した。

RQ1. 「ひく」のプロトタイプ義はどのように認定するか。

RQ2. 「ひく」の拡張義はどのように認定するか。

RQ3. 「ひく」の複数の語義はどのように関連づけられるか。

3. 研究方法

意味分析の材料選定については、本来用例を網羅的に収集できるコーパスデータが望ましいが、用例が多くなると、分析手続きが複雑になり、精度が下がる可能性があるため、ここでは現代語の意味用法について比較的詳細な意味記述を行っている『大辞林』（第3版）に掲載された「ひく」の62個の例文（古典的意味用法と慣用的意味用法を除く）を使用し、意味構造を分析する。また、意味分析の4つの課題を解決するために、崔（2019）で提案された意味記述の精緻化方法を採択する。以下に具体的な分析手続きを述べる。

1) 意味分析に使用する理論的枠組みは、先行研究に倣い、個々の語義を包括に捉えられるLakoff（1987）の提唱した「放射状カテゴリー」を援用する。

2) プロトタイプ義の認定では、田中（1990）が提唱した「イメージの具体性、観察可能性」という基準に従い、「ひく」の様々な意味用法の中から、「ひく」動作として最も具体的、無標的な例文グループを抽出し、プロトタイプ義を認定する。

3) 語義の認定では、適用範囲の広さの点から森山（2015）が提唱した「動詞自体の意味（置換語）とその共起項を重視した語義認定方法」を採択する。具体的には、分析対象となる「ひく」の62個の例文を動詞自体の意味の類似性により分類し、各グループの語義の置換語を提示することで語義を区分する。その上で各語義が活性化されるために必要となる共起項の種類とその名詞句の意味特徴を明らかにし、両者に基いて意味記述を行う。

4) 複数の語義の関連性を示すために、3種類の動機付けをさらに展開させた瀬戸（2007）が設定した意味展開パターンを用いる。初山（2001）の定義によると、3種類の動機付けはそれぞれ類似関係を表すメタファー、隣接関係を表すメトニミー及び包摂関係を表すシネクドキであるが、この分類を基準に瀬戸（2007）はさらにメタファーに3種類、メトニミーに35種類、シネクドキに2種類の下位分類を設けている。この分類を用いることで意味展開のプロセスの透明性を保証することができるとされている。しかし、瀬戸（2007）は動詞自体の意味に注目し、それが取りうる共起項に関する配慮があまりなされていないため、「道具目的語」、「結果目的語」などの特殊な意味用法の意味展開パターンについての言及がない。一方、瀬戸（2014）では、「線をひく」のような「結果目的語」用法は原因・プロセス・結果の連鎖において認知の焦点が被動作主「ペン」からそれと時間的に隣接する結果物「線」へ移動したとしている。瀬戸（2014）はそれをメトニミーの一種類とみなし、Langacker（1991）が提唱した「プロファイル」と「ベース」の関係で説明するのが有効であるとしている。具体的に、「プロファイル」とはある認知領域の中で、言語使用者が特に注目し際立ちが与えられた部分であり、言語表現が指し示す部分である。それに対し、「ベース」はこの領域で想起される概念内容の全体で、背景化された部分である。「線をひく」の場合で考えると、まず動作主「人」と被動作主「ペン」が事態の中で「プロファイル」の焦点になっている。しかし、認知主体の関心が「ペン」から結果物「線」へ移動したのに伴い、「線」という本来背景化された「ベース」が言語化されるようになった。このような時間的隣接関係に基づき、「ペンをひく」から「線をひく」へと意味拡張が起きた。ゆえに、隣接関係を表すメトニミーによる意味拡張の中には「プロファイル焦点の移動」が潜在していることが示唆される。そこで本研究では瀬戸（2007）の分類を補完するため、メトニミーによる意味拡張の説明では「プロファイル焦点の移動」という概念を援用する。

4. 分析結果

本章では「ひく」のプロトタイプ義と拡張義の分析結果を述べる。意味記述のメタ言語の設定は、森山（2015）を踏襲し、動詞自体の意味を置換語（太字で表示）で提示するとともに、その語義が活性化されるための共起項、及びその名詞句の意味特徴を [] で括って記述する。また、語義間の関連性を示す際、メタファーによる拡張

義は「類似関係」によって「具体から抽象へ」と意味拡張するため、本来の語義を〈 〉で括って示し、それによって生じた拡張義を＝で示す。例えば、「同情」をヲ格に共起する「ひく」の語義は「(相手の注意/関心を)向けさせる」であるが、それは「自分のほうに移動させる」という語義がメタファー的に拡張したものであるため、「〈自分のほうに移動させる〉＝向けさせる」と記述する。一方、メトニミーによる拡張義は「隣接関係」に基づく意味拡張であり、「プロファイル焦点の移動」により、新たな意味が動詞に加わるため、それを「+」で表し、「動詞本来の語義+付加された部分＝拡張義の語義」と示す。例えば、「大根をひく」ではプロファイルの焦点が起点「全体の中」に移動したことから、「自分のほうに移動させる」という本来の意味に、「出す」という新しい意味が付加し、「取り出す」という意味が拡張した。ゆえに、「自分のほうに移動させる+出す＝取り出す」と記述する。シネクドキによる拡張義は「ひく」の意味分析で見られなかった。

4.1. 「ひく」のプロトタイプ義

田中(1990)が提唱した「イメージの具体性、観察可能性」という基準をもとに、62個の例文から「ひく」動作として最も具体性が高く、無標的な意味を表すものをプロトタイプとして抽出する。杉村・楠見(2000)は「ひく」の最も基本的な動作として、「対象物が具体的で、明確な対象物に力が加わり、移動方向が拡散せず、物体が主体側へ移動する」と指摘した。この観点をもとに、本研究では「ひく」の最も基本的な動作として次のような選出基準を設定した。1) 動作主が意志を持つ人、2) 被動作主が具体的な物、3) 線状イメージで主体側へ手繰り寄せる具体的な動作。これらを基準に62個の例文を確認した結果、(1)～(6)の例文が選出された。

- | | |
|---------------------|-----------------|
| (1) 地曳き綱をひく | (2) 紐をひくと明かりがつく |
| (3) 押してもひいてもびくともしない | (4) サイドブレーキをひく |
| (5) 引き金をひく | (6) 的に向かって弓をひく |

上記例文からみると、「ひく」の最も基本的な動作を表す例文では必須となる共起項はガ格とヲ格である。ガ格は動作主を表すため、「人」という有情物が最も無標であり、無標ゆえに省略される場合も多い。ヲ格は典型的には被動作主を表すが、「地曳き綱」、「紐」のような細長い線状の物である場合もあれば、「サイドブレーキ」、「引き金」、「弓」のようなそれ以外の形状の物もある。ゆえに、ここでは「物」と記述する。以上を踏まえ、「ひく」のプロトタイプ義を下記のように記述することができる。

〈0〉 [人] が・[物] を・[自分のほうに移動させる]

4.2. 「ひく」の拡張義

本節では「ひく」の拡張義の意味記述を行う。

- | | | |
|----------------|--------------|---------------------|
| (7) 荷車をひく | (8) 裾をひいて歩く | (9) 犬が橇をひいている |
| (10) 馬をひいて村へ帰る | (11) 羊を屠所にひく | (12) たくさんの貨車をひいた機関車 |

(7)～(11)は、語義〈0〉と同じように自分の側に手繰り寄せる具体的な行為であるが、動作主は「犬」のような「動物」にも、被動作主は馬、羊のような「生き物」にも拡張している。動作主「人/動物」が被動作主「生き物/物」に力を加え、それを自分のほうに移動させると同時に、動作主も一緒に移動することになる。この2つの移動動作の間には同時、すなわち時間的隣接関係(共起関係)が存在しているため、語義〈0〉からメトニミーによって意味拡張したと考えられる。ゆえに、ここでは語義〈1〉のように記述する。

なお(12)では本来、人が機関車を操縦して貨車を自分と一緒に移動させることになる。しかし、人という動作主は認知主体の視野に入らないため、プロファイルの焦点が視覚的に捉えやすい「機関車」へ移動し、ガ格で表されるようになった。

〈1〉 [人/動物] が・[生き物/物] を・[自分のほうに移動させる+自分も=自分と一緒に移動させる]

- | | | |
|------------|--------------|------------|
| (13) 大根をひく | (14) おみくじをひく | (15) ばばをひく |
|------------|--------------|------------|

(13)～(15)では、動詞の意味が「取り出す」に変化するのに伴い、被動作主が「大根」、「おみくじ」、「ばば」のような特定の「物」に限定される。また、「土の中から」「箱の中から」といった起点も前景化されるが、言語化されないこともあるため、()をつけて、「(全体から)」と記述する。「人が物に力を加えて自分のほうに移

動かせる」というプロセスを経て「物を全体の中から取り出す」という結果が生じることから、語義<2>は語義<0>からメトニミーによって意味拡張したと考えられる。

<2> [人] が・[物] を・(全体から) [自分のほうに移動させる+出す=取り出す]

- (16) 体をひいて車を避ける (17) もう少しあごをひいて (18) 兵をひく

これらでは、動詞の意味が「後退させる」に変化したため、被動作主は「出ている体」に限定される。また、「後退」の意味には「人の顔が向いているほうが前方で、背中のほうが後ろ」という人間の認識基盤が潜在している。「人が出ている体を自分のほう（後ろ）に移動させる」というプロセスを経て「それを後退させる」という結果が生じることから、語義<3>は語義<0>からメトニミーによって意味拡張したと考えられる。

<3> [人] が・[出ている体] を・[自分のほうに移動させる+後退する=後退させる]

- (19) 同情をひく (20) 気をひく (21) 人の目をひくような服
(22) 美貌にひかれる (23) 人柄にひかれる

この意味用法では、「対象の注意/関心などを向けさせる」という動詞の意味変化に伴い、動作主は意志を持つ「人」以外に、「服」、「悲惨な遭遇」といった「物/事」にも拡大される。被動作主は「対象の注意/関心など」に限定される。「生き物/物/事がその属性で対象の注意/関心などを自分のほうに向けさせる」という抽象的動作と「人が道具で物を自分のほうに移動させる」という具体的動作の間には類似性（機能類似）が認められることから、語義<4>は語義<0>からメタファーによって意味拡張したと考えられる。また、この意味用法が受け身になると、動作主またはその属性は(22)と(23)のように二格を取る。

<4> [生き物/物/事] が・(ある特質で) [対象の注意/関心など] を・[自分のほうに移動させる]=向けさせる]

- (24) 裾を長くひく (25) 伊勢は窓を閉め、カーテンをひいた
(26) 庭前に仮の板敷を敷き、幕をひいた (27) 納豆が糸をひく

(24)~(26)では、動詞の意味が「延びさせる」に変化したのに伴い、被動作主は「裾」、「カーテン」、「幕」のような「一端が固定されて移動しない延びる物」に限定される。人が延びる物を自分のほうに移動させることで、それを延びさせることになる。「人が延びる物を自分のほうに移動させる」というプロセスを経て「物を延びさせる」という結果が生じることから、語義<5>は語義<0>からメトニミーによって意味拡張したと考えられる。

(27)では、本来動作主「人」が被動作主「納豆」に力を加えて自分のほうに移動させた結果、「糸」が生じる。しかし、プロファイルの焦点が動作主「人」から、被動作主「納豆」と、それが変化した結果「糸」へ移動したため、「納豆」と「糸」が事態の中で一番目と二番目に際立つ参加者になり、ガ格とヲ格で表されるようになった。

<5> [人] が・[一端が固定されて移動しない延びる物] を・[自分のほうに移動させる+延ばす=延びさせる]

- (28) 水道をひく (29) 電話をひく (30) 用水路を作って水をひく

(28)では、動詞の意味が「通じさせる」に変化したことから、被動作主が「水道」などに限定される。人が水道を村に延ばし、村に水を通じさせることになる。「人が水道を延びさせる」という抽象的動作と「人が延びる物を延びさせる」という具体的動作の間に類似性（機能類似）が認められるため、メタファーによる意味拡張が見られた。また、「人が水道を延びさせる」というプロセスを経て「水を通じさせる」という結果が生じることから、メトニミーによる意味拡張も見られた。ゆえに、語義<6>は語義<5>からメタファーとメトニミーによって意味拡張したと考えられる。

(29)では、人が電話線を村に延ばすことによって電話を通じさせることになるが、プロファイルの焦点が「電話線」から、それと空間的に隣接する「電話」へ移動したため、ヲ格が「電話」になった。同様に(30)ではプロファイルの焦点が被動作主「用水路」からそれと空間的に隣接する経路「水」へ移動している。

<6> [人] が・[水道など] を・(村に) [<延びさせる>+設置する=通じさせる]

- (31) 線をひく (32) 図面をひく

(31) と (32) では、動詞の意味が「描く」に変化したため、被動作主は「ペン」に限定される。しかし、プロファイルの焦点が結果物「線」に移動したため、「線」が前景化され、ヲ格で示される。また、着点「紙」も前景化される。動作主「人」が被動作主「ペン」に力を加えて紙の上で移動させた結果、線が生じることになる。「人がペンを紙面の上で移動させる」というプロセスを経て「痕跡を残し、線を描く」という結果が生じることから、語義<7>は語義<0>からメトニミーによって意味拡張したと考えられる。

<7> [人] が・[線] を・[紙に] [移動させる+痕跡を残す=描く]

- (33) フライパンに油をひく (34) 紙に蠟をひく

(33) と (34) では、動詞の意味が「表面に塗る」に変化している。そのため、被動作主は「油など」に限定される。また、着点「フライパン」なども事態の参与者として前景化される。動作主「人」が被動作主「油」に力を加え、それをフライパンに移動させることで表面に広げることになる。「油を移動させてフライパンに痕跡を残す」というプロセスを経て「その表面に広げる」という結果が生じることから、語義<8>は語義<7>からメトニミーによって意味拡張したと考えられる。

<8> [人] が・[油など] を・[フライパン] に・[移動させる+痕跡を残す+広げる=表面に塗る]

- (35) コーヒー豆をひく (36) そばの実を石臼でひいて粉にする

(35) と (36) では、動詞の意味が「砕く」に変化している。被動作主は本来「石臼」などに限定される。人が石臼を自分のほうに移動させ、豆などに力を加えて形を変え、豆を粉々にする。しかし、事態の中でプロファイルの焦点が「石臼」からそれと空間的に隣接する「豆」に移動したため、ヲ格が「豆」、デ格が「石臼」で表すようになった。「人が石臼を自分のほうに移動させる」というプロセスを経て「豆を砕く」という結果が生じることから、語義<9>は語義<0>からメトニミーによって意味拡張したと考えられる。

<9> [人] が・[石臼] で・[豆など] を・[自分のほうに移動させる+形を変える=砕く]

- (37) 鋸で丸太をひく (38) ろくろでひいてこけしを作る

これらでは、動詞の意味が「切る」に変化している。被動作主は本来「鋸」などの道具である。動作主「人」が被動作主「鋸」を自分のほうに移動させることで、木材を切断する。しかし、この事態では二番目に際立つものが「鋸」から、それと空間的に隣接する「木材」に移動したため、ヲ格が「木材」、デ格が「鋸」で表すようになった。「人が鋸を自分のほうに移動させる」というプロセスを経て「木材を切断する」という結果が生じることから、語義<10>は語義<0>からメトニミーによって意味拡張したと考えられる。

<10> [人] が・[鋸など] で・[木材] を・[自分のほうに移動させる+切断する=切る]

- (39) バイオリンをひく (40) 琴をひく (41) ピアノをひく

(39) では、動詞の意味が「演奏する」に変化している。被動作主は本来「楽器の弓」に限定される。動作主「人」が被動作主「楽器の弓」を自分のほうに移動させることで、楽器に音を出させる。しかし、プロファイルの焦点が被動作主「弓」から、それと空間的に隣接する「バイオリン」のような「楽器」に移動したため、ヲ格が「楽器」になった。「人が弓を自分のほうに移動させる」というプロセスを経て「楽器を演奏する」という結果が生じることから、語義<11>は語義<0>からメトニミーによって意味拡張したと考えられる。また、(40) と (41) のようにそれぞれの楽器に備わった線が心内イメージと重なったことで弓を使わずに演奏する琴やピアノなどの楽器一般に拡張した用法も見られた。

<11> [人] が・[楽器] を・[自分のほうに移動させる+音を出す=演奏する]

- (42) 風邪をひく

(42) では、動詞の意味が「感染する」に変化したため、被動作主が「風邪」という抽象物に限定される。「人が風邪を自分の体内に吸い込む」という抽象的動作と「人が物を自分のほうに移動させる」という具体的動作の

間には類似性（機能類似）が認められることから、語義<12>は語義<0>からメタファーによって意味拡張したと考えられる。

<12> [人] が・[風邪] を・[〈自分のほうに移動させる〉=感染する]

- (43) 徒然草の一節をひく (44) 辞書をひいて調べる
(45) 電話帳をひいて番号を調べる

(43) では、動詞の意味が「引用する」に変化している。そのため、被動作主は「一節」などの「内容」に限定される。また、「徒然草」のような起点を表す「書物」が事態の参与者として前景化される。「人が内容を書物から取り出す」という抽象的動作と「人が物を全体の中から取り出す」という具体的動作の間には類似性（機能類似）が認められるため、メタファーによる意味拡張が見られた。さらに、「人が内容を書物から取り出す」というプロセスを経て「内容を引用する」という結果が生じるため、メトニミーによる意味拡張も見られた。ゆえに、語義<13>は語義<2>からメタファーとメトニミーによって意味拡張したと考えられる。(44) と (45) では、認知主体にとって視覚的に捉えられる具体物が焦点化されやすいため、プロファイルの焦点が抽象的な被動作主「内容」から、具体的な起点「辞書」、「電話帳」に移動し、ヲ格が「辞書」、「電話帳」になった。

<13> [人] が・[内容] を・(書物から) [〈取り出す〉+使用する=引用する]

- (46) 10から3をひくと7になる (47) 毎月の給料から税金をひく

(46) (47) では、動詞の意味が「減らす」に変化したため、被動作主は「数値など」に限定される。また、起点「全体」も前景化されている。動作主「人」が被動作主「数値など」に力を加え、それを自分のほうに移動させて「全体」の中から減らすことになる。「人が数値を全体の中から取り出す」という抽象的動作と「人が具体物を全体の中から取り出す」という具体的動作の間には類似性（機能類似）が認められるため、メタファーによる意味拡張が見られた。また、「人が数値を全体の中から取り出す」というプロセスを経て「数値を減らす」という結果が生じるため、メトニミーによる意味拡張も見られた。ゆえに、語義<14>は語義<2>からメタファーとメトニミーによって意味拡張したと考えられる。

<14> (人が) [数値など] を・[全体] から・[〈取り出す〉+除する=減らす]

- (48) 一歩ひいて考える (49) 思わずひく雰囲気だった
(50) 進むこともひくこともできない
(51) 今度の公演を最後に舞台からひくことになった
(52) 言い出したらあとには引かない (53) H先生はこの三月で本校をおひきになる

(48)~(50) では、動詞の意味が「やめる」に変化している。そのため、被動作主は本来「ある積極的な態度」に限定される。人が物事に対する積極的な態度に力を加え、それをある場面から後退させることになる。しかし、抽象的な「態度」がプロファイルの焦点になりにくいいため、言語化されなくなり、「ひく」自体も他動詞から自動詞へ変化した。「ある積極的な態度が特定の場面から後退する」という抽象的動作と「出ている体が後退する」という具体的動作の間には類似性（機能類似）が認められることから、語義<15>は語義<3>からメタファーによって意味拡張したと考えられる。

また、(51)、(52)、(53) のように、それぞれ起点「舞台」、着点「あと」、起点「本校」がプロファイルの焦点になり、言語化される意味用法も見られた。特に、(53) の「本校」は動作主に次ぎ、二番目に際立つ参与者であるため、カラ格ではなく、ヲ格で表される。

<15> [人] が・{積極的な態度を} (ある場面から) [〈後退する〉=やめる]

- (54) 腫れがひく (55) 潮がひく
(56) 汗がひく (57) 顔から血の気がひく (58) やっと熱がひいた

これらでは、動詞の意味が「なくなる」に変化している。そのため、被動作主が抽象物「ある状態」に限定される。しかし、ある状態が自らなくなることを表すために、事態の中で最も際立つ動作主「人」がプロファイル

の焦点から外され、二番目に際立つ被動作主「ある状態」が最も際立つものになり、ガ格で表すようになった。また、「ある状態がなくなる」と「何か実際に後退すること」の間には類似性（機能類似）が認められることから、語義<16>は語義<3>からメタファーによって意味拡張したと考えられる。

<16> [ある状態] が・(ある場所から) [〈後退する〉=なくなる]

(59) 声を長くひく

(59) では、動詞の意味が「(時間的に) 延ばす」に変化している。そのため、被動作主は「声」という抽象物に限定される。「人が声を延ばす」という抽象的動作と「人が具体物を延ばす」という具体的動作の間には類似性（機能類似）が認められることから、語義<17>は語義<5>からメタファーによって意味拡張したと考えられる。

<17> [人] が・[声] を・[〈延びさせる〉=(時間的に) 延ばす]

(60) この子は祖父の血をひいて気が強い (61) 彼の学説はドイツ観念論の流れをひく

(60) と (61) では、動詞の意味が「受け継ぐ」に変化している。そのため、被動作主は「血」、「流れ」などの抽象物に限定される。また、起点「祖父」、「ドイツ観念論」という「源」も事態の参与者として前景化される。「人が血/流れを源から自分のほうに延びさせる」という抽象的動作は「人が延びる物がある場所から自分のほうに延びさせる」という具体的動作の間には類似性（機能類似）が認められることから、語義<18>は語義<5>からメタファーによって意味拡張したと考えられる。

<18> [人] が・[血など] を・(源から) [〈延びさせる〉=受け継ぐ]

(62) 車が歩行者をひいた

(62) では、動詞の意味が「傷つける」に変化したため、被動作主は殺傷の対象である「生き物」に限定される。「車」という道具も事態の参与者として前景化される。人が車に力を加え、それを移動させることで生き物を傷つける。しかし、動作主「人」が車の中に座り、認知主体の視野に入らないため、視覚的に捉えやすい「車」がプロファイルの焦点になり、事態の中で最も際立つ部分として、ガ格で表すようになった。「人が車で生き物を傷つけること」と「人が鋸で木材を切ること」の間には類似性（機能類似）が認められるため、語義<19>は語義<10>からメタファーによって意味拡張したと考えられる。

<19> [車] が・[生き物] を・[〈切る〉=傷つける]

以上をまとめると、「ひく」の様々な意味で使用された例文に基づき、20個の語義が認定された。これらの語義の意味記述と語義間の相互関係を表1に示す。

5. 結論と今後の課題

本研究は初山（2001）が指摘した多義語分析の4つの課題に焦点を当て、多義動詞「ひく」の意味分析を行い、意味記述の精緻化を試みた。その結果、以下のことが明らかになった。1) 「ひく」の最も具体性が高く、無標的な例文に基づき、プロトタイプの意味を「人が物を自分のほうに移動させる」と認定することができる。2) 「動詞自体の意味（置換語）とその共起項を重視した語義認定方法」を用いて「ひく」の語義を20個に認定できる。また、「ひく」の意味記述で取りうる共起項には6種類があり、それぞれ「動作主」、「道具」、「被動作主」、「被動作主が変化した結果」、「起点」及び「着点」である。これらの共起項及び動詞自体の意味変化を記述することで、「ひく」の語義認定及び意味拡張のプロセスの透明性を保証し（森山, 2017）、語義を厳密的に記述することができると言える。3) 「ひく」の拡張義はプロトタイプ義を中心に、メタファー（機能類似）とメトニミー（共起関係、プロセスで結果を表す）という動機付けによって意味拡張した。また、事態の中でプロファイルの焦点が移動した結果、「結果目的語」、「道具目的語」、「起点目的語」、「経路目的語」、「道具主語」及び自動詞の意味用法など特殊な意味用法が派生した。

表1 「ひく」の意味記述と語義間の相互関係

語義	AG (が)	INSTR (で・を)	PAT・ RSLT(を)	SRC (から・を)	GOL (に)	動詞の意味	例文 (目的語)	備考
0	人		物			【ひく】：自分のほうに移動させる	綱、紐	PT
0→1	人/動物		生き物/物			【ひく】+自分も=自分と一緒に移動させる	荷車、馬	MN
0→2	人		物	(全体)		【ひく】+出す=取り出す	大根、おみくじ	MN
2→13	人		内容	(書物)		<取り出す>+使用する=引用する	辞書、電話帳	MP, MN
2→14	(人)		数値など	全体		<取り出す>+除する=減らす	三、税金	MP, MN
0→3	人		出ている体			【ひく】+後退する=後退させる	体、あご	MN
3→15	人			(場面)		<後退する>=やめる	一步、雰囲気	MP
3→16			ある状態			<後退する>=なくなる	腫れ、潮	MP
0→4	生物など	(特質)	注意/関心			<【ひく】>=向けさせる	同情、人の目	MP
0→5	人		延びる物			【ひく】+延ばす=延びさせる	裾、カーテン	MN
5→6	人		水道など		村	<延びさせる>+設置する=通じさせる	水道、電話	MP, MN
5→17	人		声			<延びさせる>=(時間的に)延ばす	声	MP
5→18	人		血など	源		<延びさせる>=受け継ぐ	血、流れ	MP
0→7	人		線		(紙)	【ひく】+痕跡を残す=描く	線、図面	MN
7→8	人		油など		フライパン	【ひく】+痕跡を残す+広げる=表面に塗る	油、蠟	MN
0→9	人	石臼	豆など			【ひく】+形を変える=砕く	豆、そばの実	MN
0→10	人	鋸など	木材			【ひく】+切断する=切る	丸太	MN
10→19	(人)	車	生き物			<切る>=傷つける	歩行者	MP
0→11	人		楽器			【ひく】+音を出す=演奏する	バイオリン、琴	MN
0→12	人		風邪			<【ひく】>=感染する	風邪	MP

注：PTはプロトタイプを表す；MNはメトニミー、MPはメタファーを表す。

今回の意味記述の精緻化試案が他の多義動詞の意味分析に応用できるならば、分析の客観性を高め、分析結果の不一致をある程度解消することが期待できる。しかし、多義動詞の意味分析では内省分析以外にも心理実験やコーパス分析といった分析手法が挙げられている。これらの手法を用いて内省分析の結果を検証する必要もあり、今後の課題としたい。

【謝辞】

本稿の分析方法及び意味分析表の作成につき、森山新先生から詳細なご指導、ご助言をいただきました。この場を借りて感謝の意を表したいと思います。

【参考文献】

崔 暁文 (2019) 「認知意味論の観点からみた多義動詞の意味分析方法—多義動詞の意味記述の精緻化を目指して—」『言語文化と日本語教育』54, 1-10.

杉村和枝・楠見孝 (2000) 「多義動詞『ひく』の意味派生を支えるイメージスキーマの変容」『表現研究』71, 27-34.

鷺見幸美 (1997) 「動詞『ひく』の分析」『言葉の科学』9, 185-203.

瀬戸賢一 (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』小学館

瀬戸賢一 (2014) 「語の多義性から見た文法構造」『英文学研究』支部統合号6(0), 339-346.

田中茂範 (1990) 『認知意味論 英語動詞の多義の構造』三友社出版

野田大志 (2017) 「日本語多義動詞の意味分析に関する覚書—メタ言語の選定及び語義の区分—」『愛知学院大学教養部紀要』65(3), 73-91.

初山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」山梨正明 (編) 『認知言語学論考1』ひつじ書房

森山新 (2012) 『日本語多義語学習辞典 動詞編』アルク

森山新 (2015) 「日本語多義動詞『切る』の意味構造研究—心理的手法により内省分析を検証する—」『認知言語学研究』1, 138-155.

森山新 (2016) 「上下メタファーの観点からみた動詞『あがる』の意味構造分析—内省分析法の確立をめざして—」『お茶の水女子大学人文科学研究』12, 231-241.

- 森山新 (2017) 「日本語学習辞典開発のための多義基本動詞の意味構造分析法の確立—内省分析を中心として—」『日本認知言語学会論文集』 17, 402-408.
- 李在鎬 (2008) 「決定木を用いた多義語分析—多義動詞『出る』を例に一」『日本認知言語学会論文集』 8, 55-65.
- 李澤熊 (2016) 「動詞『ひく』の多義構造—日本語教育の観点から—」『名古屋大学日本語日本文化論集』 24, 1-25.
- Gries, S. T. (2006). Corpus-based methods and cognitive semantics: The many senses of to run. *Corpora in cognitive linguistics: Corpus-based approaches to syntax and lexis*, 57-99.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. II, Descriptive application*. Stanford Calif: Stanford University Press.